

入選 滋賀県 武渕 奨悟 様（20代 男性）

新しい年を迎えて二週間後、父は息を引き取った。まさか、自分の父が五十代という若さで亡くなってしまうなんて思ってもみなかった。

これからは、私が母の生活を支えなければならない。そうってはいたが、身重の妻を持つ二十代の私ができることなどほとんどなかった。今後の生活を考えると、不安と焦燥が入り混じり、自らの落ち着きを失いつつあった。

そんな時、父の職場から「年金の請求ができる」という連絡を受け取った。今まで、年金について深く考えたことはなかった。むしろ、私にとって年金制度は煩わしいものでしかなかった。「私が高齢者になった時に、年金を受け取ることにはできるのだろうか」という不安感が満ちていたのだ。

しかし、私たちはこの「年金」に大いに救われた。それと同時に、亡き父に感謝した。「年金は高齢期に受け取るもの」という感覚であったため、遺族年金の制度について全くの無知であったのだ。この遺族年金を受け取ることが私にとってどれだけ支えになったことか。しかも、母には中高齢寡婦加算という制度まで適用されるという。その時初めて、年金制度がこれほどまで手厚く、人々の生活を支えることに寄与していることを痛感した。そして、日本という国に暮らせていることを幸せに感じた。

この「年金」があることによって、現在の母の暮らしが維持でき、私も多くの負担をすることなく、生活することができている。間接的ではあるかもしれないが、私も「年金」に支えられているのだ。しかし近年、「年金はいつか破綻する」という話や「年金なんて今の若い人は将来もらえない」という話を耳にする。「年金の保険料なんて払わなくていい」といったことも聞こえてくる。年齢が若い人ほど、そのような傾向があるのではないか。

確かに未来が一体どうなっていくのかは誰にも分からない。だが、不確定要素の多い未来にこそ、備えをしておかなければならないと思う。その意味において、年金制度は重要な役割を担っている。自分がいつ、障害を負うことになるのか、いつ、妻子を残したまま亡くなることになるのか、これも分からないのである。もしも仮にそうなった場合、自分自身や家族の経済生活が行き詰まる可能性が大きくなる。経済的ひいては精神的にも安心して生活していくことが脅かされるかもしれない。

そのように考えると、年金保険料をきちんと納めないということは非常に恐ろしくも感じる。私は、今回経験したことを少しずつ友人・知人に伝えていくことで、「年金」について広く知ってもらえたらと考えている。同時に、私自身が保険料を納めて下さる方々によって救われていることも忘れないでいかなければならない。

年金について私なりに調べていくと、最近では年金に関わる法律の改正も進められており、さらなる年金制度の改善が図られているところのようである。国民が支えあう公的な制度としてこれからも大きな役割を果たしていけるよう、私自身も微力ながら協力していきたい。

